―研究論文―

マルチメディア日本語コンテンツ使用時における学習ストラテジーの特徴

岩下 智彦・岩本 尚希・三國 喜保子・谷口 美穂

要　旨

本研究では、日本語学習者の教室外におけるマルチメディア日本語コンテンツ使用時の学習ストラテジーの特徴を明らかにすることを目的とし、1) 学習ストラテジーの使用実態に関する質的調査、および 2) 学習ストラテジーの使用頻度についての量的調査を行った。調査協力者は日本語学習歴が1年以上の20代の学習者それぞれ 1) 31名（海外7カ国）、2)262名（海外11カ国）である。その結果、日本語学習者の使用している学習ストラテジーは58項目からなり、それらは【社会文化への注意】【語彙の理解】【語彙の記憶】【文字による理解】【内容への集中】【音声への注意】の6つの因子によって構成されていることが示された。日本語学習者はマルチメディア日本語コンテンツに現れる文字・語彙、音声などの様々な側面に注目しており、映像を含む音声・文字などの多様なインプットは意味理解や社会文化の学習の促進に繋がることが示唆された。

【キーワード】 学習ストラテジー　映像　日本語コンテンツ　教室外学習　自律学習

1. 研究の背景と問題意識

外国語の習得は教室内での授業と教室外での外国語との接触が組み合わされたときに最も早く進むと言われている（Ellis 1994）。近年、日本語学習における教室内外の連携（トムソン木下 2009）やインターネットなどを通じたメディア接触による日本語学習の動機づけ（鄭 2002、熊野・廣利 2008、石塚他 2009など）の研究も盛んに行われ、日本語学習者の教室外における日本語との接触への注目が高まっている。日本語学習者のメディア使用の実態を調査した三國他（2011）の結果からも、日本語学習者が多様なメディアを通じて、映像、音声、文字、人など様々な形で日本語に接触し、教室外における日本語接触の機会が拡大していることが明らかになっている。

しかしながら、学習者のこのような教室外における幅広い日本語接触と日本語学習との関連性や、多様なメディアを利用した日本語学習の過程については、これまでのところ十分な研究が行われているとは言えない。学習者自身にとって教室外の活動は「娯楽」であり、必ずしも「学習」とは捉えられていないとの考えもあるが、日本語学習者の教室外活動が教室内活動あるいは積極的な日本語使用に影響を与えていることも明らかになってきている（トムソン木下 2008、谷口 2011）。トムソン木下（2009: 192-193）は、「教室内と教室外は流動的につながっていて、日本語使用は、日本語学習の後に実現する目標ではなく両者は連続的に入り組んでいるものと捉えるべきなのではないか」と指摘している。今後、

教室内での学習について考える上でも、日本語学習者が教室外でどのように日本語に接触しているのかについて研究を進めていくことは緊急かつ重要な課題である。

日本語学習者が教師の指示以外で教室外において比較的頻繁に行っている活動は、インターネットをはじめとするマルチメディア（複合媒体）を通して「日本語で動画（テレビ番組／DVD／映画）を見る」、「日本語の歌を聴く」という活動である（トムソン木下 2009、三國他 2011）。谷口（2011）では、日本語学習者が映画やドラマ、アニメなどを自律的に利用し、積極的に日本語学習に役立てている実態がインタビュー調査から明らかにされている。その過程で、学習者は様々な言語学習ストラテジー（オックスフォード 1994）を使用している可能性が示唆されている。オックスフォード（1994）は、言語学習ストラテジーは学習者の総合的な自律学習を推進すると述べ、その重要性について指摘し、自らのストラテジー分類に基づいてストラテジー使用に関する質問紙Strategy Inventory for Language Learning（SILL）を考案した。オックスフォードは目標言語の学習に直接関わる「直接ストラテジー（Direct Strategies）」と、言語学習を間接的に支える「間接ストラテジー（Indirect Strategies）」とに二分し、それぞれに3つ（「記憶ストラテジー・認知ストラテジー・補償ストラテジー」と「メタ認知ストラテジー・情意ストラテジー・社会的ストラテジー」）の下位区分を設け、より詳細な分類を提示した（表1）。

表１　言語学習ストラテジー（オックスフォード 1994）

学習ストラテジー	直接ストラテジー	Ⅰ　記憶ストラテジー
		Ⅱ　認知ストラテジー
		Ⅲ　補償ストラテジー
	間接ストラテジー	Ⅳ　メタ認知ストラテジー
		Ⅴ　情意ストラテジー
		Ⅵ　社会的ストラテジー

谷口（2012）ではインタビューから抽出された学習者の行動を、オックスフォードの提示した言語学習ストラテジーシステムに当てはめて分析し、学習者が視聴覚メディアリソースを使用する際のストラテジー使用の分類を試みているが、項目が複数に渡っている、該当する項目がないなど、その分類には限界があると言える。その理由の一つとして、オックスフォードの言語学習ストラテジー提示以降、インターネットをはじめとするマルチメディアの普及などによって、学習リソースや学習スタイルの多様化は目覚ましく進んでおり、現代の学習者の行動を分析する枠組みとしては限界があるということが考えられる。

これまで多くの研究者がSILLをストラテジー測定ツールとして使用してきたが、その一方でSILLに対する批判も少なくない（大須賀 2009）。大須賀（2009）はストラテジー研究の動向をまとめた論文の中で、オックスフォードのSILLの修正の必要性を指摘し、特定の文脈におけるストラテジー使用を理解するためには、質的調査方法を組み合わせて使用することが必要（White et. al. 2007）であり、質問紙、インタビュー、発話思考法などいくつかの方法を組み合わせて使用するのが妥当性、信頼性の点で良い（Chamot 2004）と述

べている。さらに、今後のアプローチの可能性として言語学習ストラテジーと言語使用ストラテジーを区別する（Hsiao & Oxford 2002）必要性も示唆している。

以上の先行研究を踏まえ、本研究では日本語学習者のマルチメディアを通じた日本語のコンテンツ（以下、日本語コンテンツ）への接触について調査、分析し、教室外における日本語コンテンツ使用時の学習ストラテジーの特徴を明らかにすることを目的とする。その際、オックスフォード（1994）の言語学習ストラテジーの枠組み（SILL）を作業枠組みとして援用し、質的調査と量的調査を複合的に用いることとする。

2. 調査

2.1 調査概要

2.1.1 調査目的

本研究では、日本語学習者が日本語コンテンツに接触する際にどのような学習ストラテジーを使用し、それらのストラテジーはどのような特徴をもっているのかを明らかにするために、以下の２点を研究課題として設定する。

１）日本語学習者が日本語コンテンツに接触する際、どのような学習ストラテジーが使用されているのか。

２）それらの学習ストラテジーはどのような特徴をもっているのか。

2.1.2 調査方法

本研究では、日本語学習者が日本語コンテンツに接触する際にどのような学習ストラテジーを使用しているのかを探るために、2つの調査を行った。

まず調査１として、できるだけ多様な学習背景（属性、学習地域、学習目的等）をもつ日本語学習者31名を対象に、自由記述式のストラテジー調査を行った。その際、より具体的な事例を収集するために、各調査対象者に対しＥメール等を使用して回答内容についての具体的な質問を複数回行った。メールのやり取りに使用した言語は調査対象者の最も気持ちを表現しやすい言語とした。

調査１から得られたデータをもとにストラテジーチェックリスト（アンケート）を作成し、調査２では個々の学習ストラテジーの使用頻度を調査するために、アンケート調査を実施した。アンケート調査から得られたデータは、チェックリストの各項目について因子分析を行い、抽出された因子から日本語コンテンツ接触時の学習ストラテジーの特性を分析、考察した。

なお、本調査では、日本語学習者が教師の指示以外で教室外において比較的頻繁に行っている活動である、インターネットを通じて「日本語で動画（テレビ番組／DVD／映画）を見る」、「日本語の歌を聴く」（トムソン木下 2009、三國他 2011）という２つの活動に限定し、調査を行った[1)]。

---

1) 本研究における「日本語の歌を聴く」とは、インターネットを通じてYOUTUBEなどの動画配信サイトを利用して歌を聴いたり、ダウンロードして歌を聴くことを表す。

2.2　調査１

2.2.1　調査目的

調査１の目的は、日本語学習者が日本語コンテンツに接触する際、どのような学習ストラテジーが見られるのか明らかにすることである。そこで、次の2つの質問項目を記載した自由記述式のアンケート調査を実施した。1）日本語の動画（ドラマ、映画、アニメなど）を観るとき、どんなことを行ったり、気にしたり、考えたりするか。2）日本の歌を聴くとき、どんなことを行ったり、気にしたり、考えたりするか。

2.2.2　調査方法

調査協力者31名（国別に、タイ10名、トリニダード･トバゴ8名、中国（香港を含む）6名、韓国4名、ドイツ1名、スペイン1名、インドネシア1名）を対象に、Eメールまたは紙媒体により、上述の2つの質問項目に対する自由記述式のストラテジー調査を行った。より具体的な情報を得る必要があると感じた協力者に対しては、Eメール等を使用して回答内容についての具体的な質問を複数回行った。メールのやり取りに使用した言語は調査対象者の最も気持ちを表現しやすい言語とした。

2.2.3　調査１の結果

以下は各設問への回答の一部である。

１）日本語の動画（ドラマ、映画、アニメなど）を観るとき、どんなことを行ったり、気にしたり、考えたりするか。
- わからない言葉が何回も出て気になったら、動画を止めて辞書を引く。
- 自分の国にない文化、習慣、風俗などをネットで調べる。
- 場面・話者の関係によって違う表現・丁寧さに注意を払う。
- 字幕を見ながら翻訳の練習をする。

２）日本の歌を聴くとき、どんなことを行ったり、気にしたり、考えたりするか。
- 新しい言葉をメモする。
- 一緒に歌う。
- わかる言葉を探す。
- 歌詞を母語に翻訳する。

調査１の結果得られた回答から、回答に含まれるキーワードを手がかりに分類を行い、日本語コンテンツに接触する際の学習ストラテジーに関するストラテジーチェックリストを作成した。その際、オックスフォード（1994）を作業枠組みとして援用しながら修正を加えたり項目を追加したりした。項目を吟味し、最終的に58のストラテジーチェックリストと調査協力者の属性に関する3つの質問の計61の質問項目を作成した。ストラテジー

チェックリストの58項目は動画と歌の2種に大別され、動画に関する31項目と歌に関する27項目から構成されている。質問項目については、因子分析（調査２）の結果と合わせて表1および表2に提示する。回答形式は「1　ぜんぜんしない」から「5　よくする」の５段階評定とした。

2.3　調査２

2.3.1　調査目的

調査２では、日本語コンテンツ使用時における学習ストラテジーがどのような特徴をもっているのかを明らかにすることを目的とし、まず、調査１で作成した日本語コンテンツ使用時における学習ストラテジーリスト」（アンケート）を用いて、個々の学習ストラテジーの使用頻度についての量的調査を実施した。アンケート調査から得られたデータは、チェックリストの各項目について因子分析を行い、抽出された因子から日本語コンテンツ接触時の日本語学習ストラテジーの特徴を分析、考察した。

2.3.2　調査方法

調査は2011年9月から11月に質問紙とインターネットによるアンケートの2つの方法を用いて行った。対象者は、1年以上の学習歴をもつ20～29歳[2]の日本語学習者とした。質問紙による調査は、タイの大学と日本の専門学校に調査紙の配布および回収を依頼し、集計を行った。インターネットによる調査は、日本語コンテンツ使用時における学習ストラテジーチェックリストの質問項目をアンケートサイト上に登録し、サイトへのURLと調査依頼を添えた内容をＥメールやSMSによって配布し協力者を募った。その結果、タイの大学159名、日本の専門学校54名、インターネットによるアンケート49名の全262名から有効な回答を得た。回収率は調査紙（タイ）100％、調査紙（日本）94％、インターネットが83％であった。有効回答者の国籍は、中国（香港を含む）42名、ドイツ17名、インド9名、韓国17名、タイ163名、アメリカ8名、モンゴル2名、その他7名であった[3]。

2.3.3　調査２の分析結果

データの分析には、SPSS Statistics for Windows Ver.19を使用した。まず、集計した調査結果を動画視聴時のストラテジー31項目と歌を聞いているときのストラテジー28項目の2つに分け、探索的因子分析を行った（主成分分析法・バリマックス回転）。因子数の決定に関しては、各因子の固有値に基づいて示されたスクリープロットを参照した。その結果、動画は３因子解、５因子解、６因子解、９因子解、歌は３因子解と６因子解の可能

---

2) 対象者の基準に関しては、2010年度の調査において20代の学習者が最もインターネットの使用が多かったこと、及び学習歴が１年以上になると学習者の動画／歌の利用率が高くなることがわかったことから規定した。

3) なお、地域ごとに調査対象者数、対象者の属性が異なるが、本調査では調査地域や学習者属性による比較はせず、複数の地域を対象とした日本語コンテンツ接触時の学習ストラテジーの特徴を明らかにすることを目的としているため、全体としての特徴のみ分析、考察した。

性が示された。そこで、各因子数に基づく分析結果と質問項目とを照合しながら検討し、最も妥当だと思われる６因子モデルを採択した。また、分析の過程で因子負荷量がどの因子に対しても低い値を示した２つの項目を削除した。削除した項目は、動画視聴時についての質問項目16「わからない言葉や表現があったときは、そのまま聞き続ける」および、歌を聞いているときについての質問項目47「わからない言葉があっても、そのまま聞き続ける」である。最終的に完成した本ストラテジーリストの信頼性を示す数値であるα係数は動画がα＝.859　歌がα＝.925であり、本ストラテジーリストは高い信頼性があると言える。

最終的に、質問項目の数は、動画30項目、歌27項目となり、共に6つの因子が抽出された（表2および表3）。まず、動画視聴時の学習ストラテジー、次に歌を聞いているときの学習ストラテジーの順に各因子を構成する質問項目とその特徴について述べる。

3. 日本語コンテンツ使用時における学習ストラテジー

3.1　動画を視聴する際のストラテジー ６因子

動画は第１因子から順に【社会文化への注意】、【語彙の理解】、【語彙の記憶】、【文字による理解】、【内容への集中】、【音声への注意】と名付けた（表2を参照）。

第１因子は「ドラマの背景や場所、日本の風景や文化に注目する」、「出演者や監督についての情報を調べるといった4項目からなる。すべての項目が動画の背景となる文化や製作者の背景情報に注目していることを表しているため【社会文化への注意】と名付けた。

第２因子は「日本語のことわざや慣用句に注意して見る」、「母語と日本語との表現や意味の違いを考える」といった8項目からなる。第２因子は語彙の意味を知ることや語彙の使い方に注意を向けていることを表しているため【語彙の理解】と名付けた。

第３因子は「わからない言葉をメモする」、「わからない言葉をリストにしたり、まとめたりする」といった6項目によって構成され、すべての項目が語彙を記憶することを目的とした能動的な行動を表している。そのため【語彙の記憶】と名付けた。

第４因子は「日本語字幕を見て母語に翻訳する」、「台詞を頭の中で母語に翻訳する」といった5項目によって構成され、すべての項目が字幕や台詞といった文字による意味の理解へ焦点を合わせている。そのため【文字による理解】と名付けた。

第５因子は「次の台詞を予測する」、「物語の展開を予測する」といった3項目によって構成され、共通して動画の内容面に焦点を当てている項目であるため【内容への集中】と名付けた。

第６因子は「台詞をイントネーション･リズムなどに気をつけながら繰り返し言う」、「台詞を口に出して言う」といった4項目で構成されている。すべての項目が音声面に焦点を当てているという特徴をもっているため「音声への注意」と名付けた。

表２　動画視聴時の学習ストラテジー30項目の因子分析結果

	項　　目	1	2	3	4	5	6
第１因子	社会文化への注意						
25	ドラマの背景や場所、日本の風景や文化に注目する	0.69	0.27	−0.07	−0.06	0.12	0.07
26	自分の国の番組のスタイルとの違いを考える	0.68	0.15	−0.05	0.11	0.07	0.12
28	出演者や監督についての情報を調べる	0.56	−0.04	0.26	−0.14	0.43	0.14
27	文化・時代背景・習慣・風俗についての情報を調べる	0.48	0.05	0.03	−0.11	0.49	0.14
24	登場人物やキャラクターの台詞の表現からその人の伝えたい気持ちを考える	0.47	0.36	0.03	0.23	0.29	−0.02
12	わからない言葉や場面があったとき、動画を止めてもう一度見る	0.46	0.08	0.31	0.21	−0.03	0.10
第２因子	語彙の理解						
23	日本語のことわざや慣用句に注意して見る	0.05	0.70	0.17	0.01	0.03	0.23
7	母語と日本語との表現や意味の違いを考える	0.12	0.63	−0.01	0.15	−0.05	0.09
8	字幕を見ないで台詞を聞くことに集中する	−0.11	0.63	0.05	−0.16	0.03	−0.09
21	知らない言葉や表現に注意して見る	0.29	0.60	0.18	0.17	0.10	0.19
18	女性言葉、男性言葉、敬語、流行語、方言などに注意して見る	0.36	0.56	0.00	0.00	0.23	0.08
22	既習語彙の新しい使い方を知ろうとする	0.34	0.55	0.22	0.18	0.11	0.04
17	わからない言葉や表現があったときは、意味を推測する	0.16	0.36	−0.15	0.32	0.04	−0.23
第３因子	語彙の記憶						
13	わからない言葉をメモする	−0.02	0.08	0.85	−0.01	0.06	−0.02
14	わからない言葉をリストにしたり、まとめたりする	−0.06	0.01	0.83	0.02	0.14	0.05
15	わからない言葉があったら、他の人に聞いたり調べたりする	0.24	0.02	0.59	0.34	0.00	0.01
19	台詞を覚えるために台詞を繰り返し言う	−0.03	0.20	0.47	0.02	0.11	0.39
20	既習語彙の確認や復習をすることを心がける	0.32	0.11	0.44	0.16	0.01	0.21
11	字幕を見ないで、台詞を書き取る	−0.29	0.24	0.42	−0.22	0.17	0.34

	項　　目	1	2	3	4	5	6
第4因子	文字による理解						
6	日本語字幕を見て母語に翻訳する	−0.11	0.00	0.23	0.77	0.08	0.13
5	台詞を頭の中で母語に翻訳する	−0.07	0.14	0.04	0.73	0.07	0.00
10	母語の字幕を見て意味を理解する	0.26	−0.11	−0.10	0.57	0.07	0.19
9	日本語字幕を見て意味を理解する	0.16	0.18	0.28	0.46	−0.07	0.16
第5因子	内容への集中						
30	次の台詞を予測する	−0.12	0.15	0.00	0.10	0.81	0.05
29	物語の展開を予測する	0.24	−0.05	0.11	0.17	0.72	−0.05
31	原作との違いについて考えながら見る	0.17	0.12	0.12	0.00	0.63	0.13
第6因子	音声への注意						
3	台詞をイントネーション・リズムなどに気をつけながら、繰り返し言う	0.18	0.04	0.13	0.03	−0.07	0.76
2	台詞を口に出して言う	−0.01	−0.04	0.18	0.15	0.17	0.74
4	台詞を声に出さないで心の中で言う	0.17	0.20	−0.10	0.38	0.14	0.55
1	イントネーション・リズムに注意して見る	0.34	0.21	−0.03	0.06	0.05	0.48

3.2　歌を聞いている際のストラテジー 6因子

歌は第1因子から順に【語彙の理解】、【語彙の記憶】、【音声への注意】、【文字による理解】、【社会文化への注意】、【内容への集中】と名付けた（表3を参照）。この6因子は動画と共通しており、それぞれの因子を構成する質問項目にも動画と似た内容が同じ因子に含まれている。しかし、因子の順番が動画と異なるという違いが見られた。

第1因子は「既習語彙の新しい使い方を知ろうとする」、「知らない言葉や表現に注意して聞く」といった5項目からなり、語彙の意味を知ることや語彙の使い方に注意を向けていることを表しているため【語彙の理解】と名付けた。

第2因子は「わからない言葉をメモする」、「わからない言葉をリストにしたり、まとめたりする」といった5項目からなる。第2因子はすべての項目が語彙を記憶することを目的とした能動的な行動を表しているため【語彙の記憶】と名付けた。

第3因子は「一緒に歌う」、「発音に注意して歌う」といった4項目によって構成され、すべての項目が音声面に焦点を当てているという特徴をもっているため【音声への注意】

と名付けた。

第４因子は「母語に翻訳された歌詞カードを見て意味を理解する」、「日本語の歌詞カードを見て母語に翻訳する」といった4項目によって構成され、ほぼすべての項目が歌詞カード[4]によって意味を理解していることを表す項目であった。「母語と日本語との表現や意味の違いを考える」には歌詞カードを見ていることが明文化されていないが、意味の違いを考える際に文字を使っていることが考えられる項目であるため、第4因子を【文字による理解】と名付けた。

第５因子は「自分の国の音楽との違いを考える」、「歌や歌手についての情報を調べる」といった3項目によって構成され、共通して歌そのものというよりも、文化や歌手についての情報など、歌の背景となる部分に注目していることを表しているため【社会文化への注意】と名付けた。

第６因子は「声に出さないで心の中で歌う」、「歌詞カードを見ないで、聞き取った歌詞を頭の中で母語に翻訳する」という４項目で構成されている。そのため【内容への集中】と名付けた。

６因子解での累積寄与率は動画が52.6％、歌が62.3％であった。各因子の信頼性は動画が第１因子から順に $\alpha = 734$ 、$\alpha = 746$ 、$\alpha = 747$ 、$\alpha = 666$ 、$\alpha = 665$ 、$\alpha = 698$ 、歌が第１因子から順に $\alpha = 854$ 、$\alpha = 832$ 、$\alpha = 765$ 、$\alpha = 760$ 、$\alpha = 678$ 、$\alpha = 689$ であった。

表３　歌聴取時の学習ストラテジー27項目の因子分析結果

	項　　目	1	2	3	4	5	6
第１因子	語彙の理解						
53	既習語彙の新しい使い方を知ろうとする	0.82	0.14	0.15	0.07	0.09	0.04
52	知らない言葉や表現に注意して聞く	0.76	0.21	0.16	0.23	0.07	0.08
54	日本語のことわざや慣用句に注意して聞く	0.71	0.27	0.06	0.09	0.23	0.10
49	女性言葉、男性言葉、敬語、流行語、方言などに注意して聞く	0.58	0.33	0.21	0.12	0.12	0.22
51	既習語彙の確認や復習をすることを心がける	0.49	0.34	0.30	0.15	0.26	0.04
55	歌詞の表現から歌のメッセージを考える	0.44	0.07	0.26	0.30	0.38	0.26
第２因子	語彙の記憶						
44	わからない言葉をメモする	0.23	0.84	0.09	0.07	0.15	－0.01

[4] 本ストラテジーリストにおける「歌詞カード」は、調査対象の特性からインターネットを通じて画面に表示される歌詞も含まれるものとする。

	項　　目	1	2	3	4	5	6
45	わからない言葉をリストにしたり、まとめたりする	0.21	0.84	0.00	0.09	0.13	0.03
42	歌詞を見ないで歌の歌詞を書き取る	0.05	0.59	0.16	0.29	0.18	0.14
46	わからない言葉があったら、他の人に聞いたり調べたりする	0.37	0.59	0.08	0.16	0.04	0.23
43	わからない言葉があったら歌を止めてもう一度聞く	0.30	0.52	0.44	0.24	−0.01	0.03
第3因子	音声への注意						
33	一緒に歌う	0.02	0.10	0.81	0.18	0.09	0.17
34	発音に注意して歌う	0.19	0.06	0.73	0.03	0.16	0.24
50	歌に出てきた表現を覚えるために繰り返し歌う	0.30	0.15	0.59	0.30	0.11	0.03
32	イントネーション・リズムに注意して聞く	0.20	0.08	0.51	0.19	0.39	0.09
第4因子	文字による理解						
41	母語に翻訳された歌詞カードを見て意味を理解する	0.04	0.31	0.17	0.67	0.12	0.02
37	日本語の歌詞カードを見て母語に翻訳する	0.11	0.17	0.19	0.66	0.14	0.21
40	日本語の歌詞カードを見て意味を理解する	0.25	0.15	0.46	0.62	0.02	0.05
38	母語と日本語との表現や意味の違いを考える	0.34	0.01	0.04	0.59	0.41	0.02
第5因子	社会文化への注意						
56	自分の国の音楽との違いを考える	0.12	0.12	0.10	0.22	0.78	−0.01
57	歌や歌手についての情報を調べる	0.06	0.12	0.32	0.12	0.61	0.25
58	文化・時代背景・習慣・風俗についての情報を調べる	0.33	0.37	0.03	0.00	0.61	0.16
第6因子	内容への集中						
35	声に出さないで心の中で歌う	−0.01	0.09	0.19	−0.07	0.11	0.79
36	歌詞カードを見ないで、聞き取った歌詞を頭の中で母語に翻訳する	0.19	0.17	0.06	0.45	0.20	0.55
48	わからない言葉や表現があったら、意味を推測する	0.34	0.06	0.19	0.34	0.06	0.54
39	歌詞カードを見ないで歌詞を聞くことに集中する	0.33	0.03	0.37	0.28	0.05	0.42

分析の結果、日本語学習者が用いる日本語コンテンツ使用時の学習ストラテジーは、動画と歌共に共通する6つの因子によって構成されていることが明らかになった。つまり、日本語学習者が用いる日本語コンテンツ使用時の学習ストラテジーは、【語彙の理解】、【語彙の記憶】、【音声への注意】、【文字による理解】、【社会文化への注意】、【内容への集中】の６つの特徴を有していると言える。

4. 考察

上述の分析結果から、日本語学習者が用いる日本語コンテンツ使用時の学習ストラテジーの特徴が明らかになった。本研究では日本語コンテンツの代表的なものとして動画と歌を取り上げたが、動画を視聴している際に用いる学習ストラテジーと歌聴取時の学習ストラテジーの間には、共通点および相違点が見られた。そこで、4.1では、動画視聴時と歌聴取時のストラテジーの共通点および相違点について詳しく考察する。次に4.2では、オックスフォード（1994）の言語学習ストラテジーと本調査で得られた学習ストラテジーの比較を試みる。最後に4.3で本研究の調査から得られた日本語コンテンツ使用時の学習ストラテジーの特徴をまとめる。

4.1　動画視聴時と歌聴取時の日本語学習ストラテジーの共通点と相違点

動画視聴時と歌聴取時の日本語学習ストラテジーにおける共通点として、どちらも大別すると【語彙の理解】、【語彙の記憶】、【音声への注意】、【文字による理解】、【社会文化への注意】、【内容への集中】という6つの特徴を有しているという点が挙げられる。特に、【語彙への理解】、【語彙の記憶】といった語彙学習を示す内容は、動画視聴時には第２因子、第３因子、歌を聞いているときには第１因子、第２因子としてそれぞれ抽出されている。因子分析の結果において語彙学習を示す特徴が共に高い累積寄与率を示していることから、日本語コンテンツ使用時のストラテジーの特徴として語彙学習の要素が示されたと言える。

一方、相違点は各因子の質問項目である。本研究で作成したストラテジーリストの質問項目には、動画、歌はコンテンツの種類は異なるものの、動画視聴時の「台詞を覚えるために台詞を繰り返し言う」と歌を聴く際の「歌詞を覚えるために台詞を繰り返し言う」というように、類似した項目が複数見られた。しかし、因子分析の結果、必ずしも類似した項目が同じ因子に属したわけではなかった。これは動画と歌のコンテンツとしての特徴の違いが表れた結果だと推察できる。以下に、特徴的な違いが表れた２つの例を取り上げ、記述する。

(1) 台詞や歌詞から言葉の背景にあるものを探る

表４　因子内の構造が異なる項目①

社会文化への注意			
25	ドラマの背景や場所、日本の風景や文化に注目する	56	自分の国の音楽との違いを考える
26	自分の国の番組のスタイルとの違いを考える	57	歌や歌手についての情報を調べる
28	出演者や監督についての情報を調べる	58	文化・時代背景・習慣・風俗についての情報を調べる
27	文化・時代背景・習慣・風俗についての情報を調べる		
24	登場人物やキャラクターの台詞の表現からその人の伝えたい気持ちを考える		
12	わからない言葉や場面があったとき、動画を止めてもう一度見る		
語彙の理解			
23	日本語のことわざや慣用句に注意して見る	53	既習語彙の新しい使い方を知ろうとする
7	母語と日本語との表現や意味の違いを考える	52	知らない言葉や表現に注意して聞く
8	字幕を見ないで台詞を聞くことに集中する	54	日本語のことわざや慣用句に注意して聞く
21	知らない言葉や表現に注意して見る	49	女性言葉、男性言葉、敬語、流行語、方言などに注意して聞く
18	女性言葉、男性言葉、敬語、流行語、方言などに注意して見る	51	既習語彙の確認や復習をすることを心がける
22	既習語彙の新しい使い方を知ろうとする	55	歌詞の表現から歌のメッセージを考える
17	わからない言葉や表現があったときは、意味を推測する		

質問項目24　＜動画＞「登場人物やキャラクターの台詞の表現からその人の伝えたい気持ちを考える」・第１因子【社会文化への注意】

質問項目55　＜歌＞「歌詞の表現から歌のメッセージを考える」・第１因子【語彙表現の理解】

この２つの項目は、「台詞や歌詞から言葉そのものの意味を理解するだけでなく、行間に含まれるメッセージも汲み取ろうとする」という点で共通している。しかし、動画と歌というそれぞれのコンテンツの特徴が作用し帰属する因子が異なったと考えられる。

動画は、音声や字幕だけでなく、映像からも情報を発信している。映像には登場人物や

キャラクターの表情や動作などの非言語的な要素や背景の情報も多く含まれている。したがって、質問項目24が【社会文化への注意】を表す第１因子に含まれた結果は、言語情報だけでなく非言語情報を含めた社会文化の学習に繋がる要素が多く含まれているという動画ならではの特徴によるところが強いと考えられる。

一方、歌には映像が伴わないため、耳から入ってくる音声によって歌詞の表現を理解することが、語彙表現の理解につながる要素が強いことが推察される。質問項目55が【語彙表現の理解】の因子に含まれたのはそのためであると考えられる。

(2) 声に出さないで、心の中で言うあるいは歌う

表５　因子内の構造が異なる項目②

内容への集中			
30	次の台詞を予測する	35	声に出さないで心の中で歌う
29	物語の展開を予測する	36	歌詞カードを見ないで、聞き取った歌詞を頭の中で母語に翻訳する
31	原作との違いについて考えながら見る	48	わからない言葉や表現があったら、意味を推測する
		39	歌詞カードを見ないで歌詞を聞くことに集中する
音声への注意			
3	台詞をイントネーション・リズムなどに気をつけながら繰り返し言う	33	一緒に歌う
2	台詞を口に出して言う	34	発音に注意して歌う
4	台詞を声に出さないで心の中で言う	50	歌に出てきた表現を覚えるために繰り返し歌う
1	イントネーション・リズムに注意して見る	32	イントネーション・リズムに注意して聞く

質問項目４　＜動画＞「台詞を声に出さないで心の中で言う」･第６因子【音声への注意】
質問項目35　＜歌＞「声に出さないで心の中で歌う」・第６因子【内容への集中】

この２つの項目は、「台詞あるいは歌を声に出さないで心の中で言う」という共通点がある。この点は、歌の聴取時には自然な行動であると考えられる。したがって【内容への集中】に含まれている。

一方、動画視聴時には日本語学習者は意図的に台詞を言っていると推測される。日本語の動画の視聴時に学習のためにサイレントシャドーイングやリピートのような活動を意図的に行なっていることが考えられる。このことが、質問項目４が【音声への注意】という因子に含まれた要因であると考えられる。

4.2　オックスフォードの言語学習ストラテジーと日本語コンテンツ使用時の学習ストラテジーとの違い

本研究ではオックスフォード（1994）の言語学習ストラテジーの枠組みを援用した。しかし、オックスフォードが提示した言語学習ストラテジーは、言語学習全般におけるストラテジーを扱っているが、本研究では日本語コンテンツ使用時に限定してデータを収集したため、ストラテジーの内容もより限定された具体的なものとなった。そこで、本研究で得られたストラテジー項目とオックスフォードのものとの比較を試みた（表6）が、それぞれが複数の項目に関連しているため、単純に対照させることは困難であった。

表６　日本語コンテンツ使用時の学習ストラテジーとオックスフォードのストラテジーシステムの比較

日本語コンテンツ使用時の学習ストラテジー（本研究）	ストラテジーシステム（オックスフォード 1994）
社会文化への注意	社会的
語彙の理解	認知、補償
語彙の記憶	認知、記憶、補償
文字による理解	補償、認知
内容への集中	情意、メタ認知
音声への注意	記憶、認知

本研究の【語彙の理解】、【語彙の記憶】はそれぞれオックスフォード（1994）の「認知ストラテジー」、「記憶ストラテジー」の要素と共通しているものが多いと考えられるが、そのほかにも、映像の助けを利用して言葉の意味を推測するなどといった「補償ストラテジー」の要素も含まれていると考えられる。【文字による理解】には「認知ストラテジー」の要素と「補償ストラテジー」の言語的手がかりや母語の知識を使用するというストラテジーも含まれていると考えられる。【内容への集中】は娯楽的要素が大きく、一見言語学習と関連性が薄いように思われるが、楽しみながら日本語に触れるという「情意ストラテジー」の要素や目標の達成や言語使用の実践という「メタ認知ストラテジー」の要素が含まれている。【音声への注意】は「記憶ストラテジー」、「認知ストラテジー」の要素が含まれていると考えられる。

また、オックスフォードは「社会的ストラテジー」として、「質問をする」、「他の人々と協力する」、「他の人々へ感情移入をする」の３つの項目を挙げている。これは他者との協働学習の概念が中心となっているストラテジーである。本研究における「社会文化への注意」は日本語コンテンツから得られる様々な言語／非言語情報の中の日本文化や習慣、心情などを理解しようとする学習ストラテジーであり、多少性質が異なる要素であると考えられるが、「文化を理解する力を高める」（オックスフォード 1994）という点では社会的ストラテジーと共通点があると言える。

以上のように、日本語コンテンツ使用時の学習ストラテジーには、オックスフォードの示した言語学習ストラテジーの中には含まれていない様々な特徴がある。これについては4.3で詳述する。

4.3　日本語コンテンツ使用時の学習ストラテジーの特徴

日本語コンテンツ使用時の学習ストラテジーには、【社会文化への注意】、【語彙の理解】、【語彙の記憶】、【文字による理解】、【内容への集中】、【音声への注意】の6つの特徴があることが明らかになり、日本語学習者は日本語コンテンツに現れる社会文化、文字・語彙、音声などの多様な面に注目し、それらを利用していることが示された。今回の調査で取り上げた動画と歌に関わる日本語コンテンツには、映像、音声、文字によるインプットが含まれ、学習者はそれら一つ一つに注目するとともに、それらを同時に利用して日本語あるいは日本文化の理解に役立てていることが示唆された。4.2でもすでに述べたように、映像の助けを利用して言葉の意味を推測するなど、複数のインプットを組み合わせることにより、より効果的なストラテジー使用に繋がっていると考えられる。

また、そのような複数のインプットは日本語の意味理解を促進させるだけでなく、社会文化への注目を促していることも示唆された。日本語コンテンツから得られる様々な言語／非言語情報から、日本の文化や習慣、言葉の使い方に注意し、心情などを読み取るというストラテジーは、【社会文化への注意】という一つの因子として抽出されたが、語彙や文字、音声に加えて、社会文化的な要素や内容へ集中するという項目が一つの因子として抽出されたのは、日本語コンテンツ使用時の大きな特徴であると考えられる。【内容への集中】というのは、純粋に日本語コンテンツを楽しんでいることを示しているが、楽しんで視聴している中でも「次の台詞を予測する」などの学習の要素が入っていることも確認された。さらに、学習者は様々なストラテジーを組み合わせて使用していると考えられることからも、内容を楽しむだけでなく、同時に文字や語彙、音声などの言語面や社会文化などの非言語にも注目していることが考えられる。教室外でのメディア使用は娯楽性が強いため、学習とは区別されることも多いが、本調査の結果からは、「娯楽」と捉えられているものでも学習に繋がっていることが示唆された。

さらに、これらの日本語コンテンツはインターネットを介して視聴されることも多い（三國他 2011）ことから、動画や音楽を途中でとめたり繰り返したりすることができ、何かわからないことや気になったことがあればすぐに調べることができるという特徴をもっている。学習者はこのような探索的な活動も同時に行い、日本語コンテンツを自律的に学習に役立てていると考えられる。さらに、日本語コンテンツを他の日本語学習者と共有したり、日本人との交流の際に話題にしたりして、日本語を使用する機会を拡大しているという事例も確認された。Hsiao & Oxford（2002）では言語学習ストラテジーと言語使用ストラテジーを区別する案を提案されているが、本研究の調査結果から、学習者がもはや「言語学習」ではなく「言語使用」と言える活動も多く行っていることが示唆された。

トムソン木下（2009）では、「教室内の学習と教室外での学習者の『日常生活』とが連携

するような､包括的な教育のアプローチ」の必要性が述べられている。本研究の結果から、日本語コンテンツは学習目的に作成されているわけではないにも関わらず、言語学習における多様な側面を含み、教室外において利用可能な、包括的に日本語学習と日本語使用を結びつけることができるリソースであると言える。

５．まとめと今後の課題

本研究では、日本語学習者の教室外における日本語コンテンツ使用時の学習ストラテジーの特徴を明らかにすることを目的とし、1)日本語コンテンツ使用時の学習ストラテジーについての自由記述式の質的調査、および 2) ストラテジーの使用頻度についての量的調査を行った。その結果、日本語学習者の教室外における日本語コンテンツ使用時の学習ストラテジーは58のストラテジー項目からなり、それらは【社会文化への注意】、【語彙の理解】、【語彙の記憶】、【文字による理解】、【内容への集中】、【音声への注意】の6つの因子によって構成されていることが示された。

日本語学習者は日本語コンテンツに現れる文字･語彙、音声などの様々な側面に注目し、それらを利用している。また、映像を含む音声・文字などの多様なインプットは、意味理解や社会文化の学習の促進に繋がることが示唆された。このことから、日本語コンテンツは学習目的に作成されているわけではないにもかかわらず、言語学習における多様な側面を含み、教室外において利用可能な、包括的に日本語学習と日本語使用を結びつけることができるリソースであることが明らかになった。さらに、このような日本語コンテンツは利用者である日本語学習者が自ら選び、楽しみながら使用できることから、教室外における自律的な学習を促すリソースであると言える。

今後は、異なる母集団に対応した分析を行い、本研究で作成したストラテジー項目の信頼性および妥当性を検討するとともに、調査対象者を広げ、学習者属性による比較、ストラテジーの因子間の関連の分析などを行っていきたい。

付記

本研究は、桜美林大学言語教育研究所より2011年度研究運営助成を受けたものである。

本論文の研究は著者4人の討議で進め、三國が1章および4章3節、岩本が2章および調査の実施、岩下が3章、4章1節、谷口が4章2節および5章を担当した。

参考文献

石塚美枝･守谷智美･宮副ウォン裕子 (2009)「『現代大衆文化』の履修動機と授業への参加を通した学び ―履修者へのアンケートおよびインタビューからの考察―」『桜美林言語教育論叢』5, 桜美林大学大学院言語教育研究所, 87-101.

大須賀直子 (2009)「最近の言語学習ストラテジー研究動向」『明治大学国際日本学研究 』2 (1) , 27-41.

小田利勝 (2001)『ウルトラビギナーのためのSPSSによる統計解析入門』プレアデス出版

オックスフォードL., レベッカ（1994）『言語学習ストラテジー —外国語教師が知っておかなければならないこと』宍戸通庸・伴紀子（訳）凡人者（原著）Oxford, R. L.（1990）*Language Learning Strategies: What Teachers Should Know*. New York: Newbury House.）

熊野七絵・廣利正代（2008）「『アニメ・マンガ』調査研究・地域事情と日本語教材」『国際交流基金日本語教育紀要』4，国際交流基金，55-69.

鄭起永（2002）「日本語教育におけるマルチメディア活用の有効性と教師の役割」『明海日本語』7，明海大学，37-45.

谷口美穂（2011）「日本語学習における学習リソースとしての視聴覚メディア —インタビューからみえた学習者と教師の視点のずれ—」桜美林大学大学院言語教育研究科日本語教育専攻修士論文

谷口美穂（2012）「日本語学習者の視聴覚メディア使用 —インタビューからみえた教室外における自律学習の実態—」『言語教育』2（印刷中）

トムソン木下千尋（2008）「学習者の主体性を活かす日本語口頭評価」日本語応用言語学シンポジウム発表論文，国際交流基金シドニーセンター，2008年12月13日

トムソン木下千尋（2009）「教室内学習と教室外学習の連携、海外の日本語学習者の場合」『2009年度日本語教育学会春季大会（明海大学，2009.5.24.）研究発表 口頭 予稿集』188-193.

三國喜保子・谷口美穂・岩下智彦・川崎タルつぶら・張世襲・岩本尚希（2011）「日本語学習者のメディア利用の実態調査 —教室内外での有効なメディア活用のために—」『桜美林言語教育論叢』桜美林大学大学院言語教育研究所，147-162.

Ellis, R.（1994）*The study of second language acquisition,* Oxford: Oxford University Press.

Chamot, A. U.（2004）Issues in language learning strategy research and teaching. *Electronic Journal of Foreign Language Teaching,* 1, 12-15.

Hsiao, T-Y., & Oxford, R. L.（2002）Comparing theories of language learning strategies: A confirmatory factor analysis. *Modern Language Journal,* 86, 368-383.

White, C.Schramm, K., & Chamot, A. U.（2007）Research methods in strategy research: Re-examining the toolbox. In A.D. Cohen, & E, Macaro,（Eds.）, *Language Learner Strategies,* Oxford: Oxford University Press, 93-116.